昭和四十七年六月廿五日(日)郷土資料大房の歴史編

第四十八回史跡めぐり　大房地区

浄光寺
薬師如来
五輪塔
延宝
観音
大房の観音
一
観音
倒壊

越谷市郷土研究会

第四八回 史跡めぐり御案内

見学地跡　浄光寺・
（大房）　浄光寺薬師堂　五智如来像
薬師如来座像

○とき　六月廿五日（日曜）
集合場所　越谷駅構内　午前十時集合

○コース

北越谷駅下車
……
○ 浄光寺
○……
○ 浄光寺薬師堂
○……
○ 五智如来像
○……
薬師如来像
↓
越谷駅

○会費　一〇〇円　交通費他
昼食は各自ご持参下さい。

越谷市郷土研究会

目次

一、大房村　新編武蔵風土記稿……二
二、越谷市の文化財ガイド案……三
三、越ヶ谷放鷹と大房（三原記）……三
　鷹狩と放鷹
　放鷹と鷹狩、長谷と大房
四　越谷市の史跡と伝説……六
　浄光寺と薬師如来……七
　五智如来……八
五　史跡めぐりと大房　越谷と共に……一〇
　大房地区の厂史的視方の基礎的見解
　○物言わぬ道路と仏像
　○時代区分と特色

大房村

新編武藏風土記稿巻二百六、埼玉郡之八　四三一頁より

新方須大房村

大房村は江戸より六里の行程にあり、民戸五十、南は大沢町、北は大林村、東は弥十郎村にして、西は元荒川を隔て、狭山村に及べり。

東西十一町、南北五町余、用水は須賀村溜井より引くと水末なれば旱損ありと云　古より御料所にして今も替らず、検地は元禄十年酒井河内守紀せり

注　原本片カナ・濁点なければ点を省く。

○高札場　西の方にあり

○元荒川　北の方を流る巾二十六間許

稲荷社　村の鎮守なり千手院の持下同し　○八幡社　○弁天社　○麻利支天社

◎浄光寺　新義真言宗、末田村金剛院末、熊野山観音院と号す本尊十一面観音を安置せり。

鐘楼　宝暦六年鋳造の鐘をかく。

◎千手院　同門徒熊野山不動尊と号す。本尊不動を安す。

◎東光院　同宗三ノ宮村一乗院門徒本尊阿弥陀を安す。

◎薬師堂　相伝へて大同二年、飛騨工が一夜に建立せしと云、さはあれ一夜に建てしなと信ぜ難し　たすけ　古よりの像は先年戒のために失ひしかは　今の像を安せり　此の薬師を相入の薬師と唱う、其の教は知らず、慶安五年五石の御朱印を賜へり、浄光寺の持

◎五智堂　◎地蔵堂　千手院の持なり。

注　年号

一、元禄十年　検地　丁丑　一六九五　二ノ七年前

2、宝暦六年（鐘）　丙子　一七五六　二一六年。

3、大同二年　丁亥　八〇七年　一二六五年前

注　二　真言宗

中国の密教を空海が伝えて、新教の呪文を新しく日本で開いた大乗仏教の一宗派、大日経と金剛経を根本教義とする。印を結び呪文を唱え、陀羅尼の加持力で生き身のまま　ただちに仏になる　即身成仏ととく。

東密、真言密教、高野宗、醍醐宗

越谷市の文化財

第二集 文化財調査報告書 昭和二十九年度 市教育委員会 十二頁中央

薬師如来座像

所在地 越谷市北越谷 薬師堂内 番

浄光寺薬師堂内に在り、高さ三尺の座像で、蓮華二、五尺の蓮華台に結跏趺座し、左を趺座の上に仰けにのせ、右手を正面に向けている。絵の材に絹裂りで塗装されている。

作者、製作年代については現在不明である。またこの如来像には十二神将も完全にそろっており、この種のものは珍らしい。

五智如来像

所在地 越谷市北越谷 薬師堂境内

薬師堂境内にあり、高さ一、六尺の青銅製の立像である。五智如来とは五智を体得する仏身で阿閦像宝生像弥陀像、釈迦像、大日像とす。

建立年代は「享保三戊戌歳（一七一八年十月十五日）」で、釈迦、弥陀、宝生、大日、阿閦の蓮台に刻まれているコトが知られるが、由来等については現在不明である。

註

結跏趺座　けっかふざ　仏法の座法の一ッ
両ひざを曲げて、両足を組み、足の裏を上向けにして座る。

跏は、足の裏、　趺は足の表の意

別半跏趺座　未だ仏法の未熟な者が座る方法。右足の裏のみ上に向け、左は右ひざの下におく一座り方。

修験者など「験経」ゆりながら行う時に「或は半跏趺座の結が出るが　このことである。

越ヶ谷・放鷹と大房

三原善太郎記

越ヶ谷河岸と放鷹の事は伝承としてご存じの方は非常に多いが、その時の御猟場として使用された地域が今も「御猟場」の称で残っているが、その史的資料が定かではないと、志ある方々の言葉が私の耳朶を強く打つ。一昨年是澤博士を招聘し、場長さんの補足とで一応概況を得たるも、これに残る資料は天嶽寺本堂前の明治末期の供養碑のみであった。資料がないのではなく見出さなかったと云った方が適切であろう。

今回市史編さん室から出版された資料はがあるが、この中に次のような事柄が、次々と現われて来たのでこの度、該地区史跡めぐり資料の一端として紹介して

見よう。

資料断片

その一　御鷹部屋敷と「大房道」について

今大房道ハ古来御鷹部屋敷也。古来ハ右の所ニ御鷹部屋有之　御鷹撃申候由

享保七年より部屋取払い明地ニ成申候、其の後弘福院前野道と唱地ニ成リ　今大房道と云…

その二　御鐵屋敷

御鷹屋敷のことで「享保八年より御年貢地ニ相成候」

その三　鷹番屋敷　　○細長い葬式の様である

南北　壱間二尺二寸
東行　五十三間　　裏　一間二尺　と見えるが

その四　御茶汲み井戸

お茶差上候井戸「際地」　項載仕候…御三代様迄、

その五　飼差のこと

天明四年二月廿一日　飼差取計方之事　二二四頁

その六　御鷹水夫之事　二〇七頁

その七　御鷹番改メ「御鳥番」のこと　代官通知

その八　御鷹番取止めのこと。

その八　将軍家使用しなくなった後

水戸侯御鷹狩之節　伝馬、水夫差出之こと。

以上大房に残る事柄であるが　御殿地内に遺るものは「御鷹野橋」　板橋の仮橋が「円覚院不動尊堂」の後方にあった事が記されている。尚御殿と敷地の項は改稿一本にして近々申発表する予定だからこゝでは「横仕込所地」とだけかき　大房と無縁ではない事だけに止めたい。

越ヶ谷御殿とお茶屋式　放鷹狩猟所的使命の未明的真像が如上の八種がよく物語っている

寛長九年花田から越谷へ移されて建てられた御殿は会田出羽屋敷内（横シ込所地）の内六町四反歩余歩あるもので間数田四反と畝十三歩　畑五町五反六畝二八歩本宅一町歩屋付分（但実測三町余）の地続きである。即ち現在の御殿町に両国道（横町旧道下と御町の一部袋町越谷五丁目の一部にわたる。

御殿と出羽一家の領持祀堂所（円覚院不動尊堂）円覚院の御本尊不動尊堂を絶地として二反余をとった、その裏不動尊後方に仮橋があり「御鷹野橋」を渡って放鷹に出かけられた。橋がある事は水、湿地、窪地があった証で上方の堤防欠潰、補修工事の項で証明される。

慶長九年当地は天徳寺と地続きで寛永三年計畫の時花田任回の荒川本流で溢水の一部排水堰一間巾が出来横シ区地が減水し　柳町面へ新道を設け九尺の板橋を渡って天岳寺山門に出る。同時に板碑建った地点は道でなくなった。

この立竣地は会田出羽の頭塚(ミツベ)会田一家の仕置人の埋葬地であり、荒川で馬洗場とし大きな石塁の上で洗った出羽一家の祟場であった。ここへ異防伝いの新道があった。この地点が市神祭から二百間と記されている。

鷹狩りは鷹を狩るのでなく鷹匠が飼ひならした鷹を放って獲物をとる方法で　武士たちが弓矢鉄砲で打つ外飛び立ってにげるものをこの鷹にとらせる「空駕けるる猟犬」と云った方がよいだろう。

この放鷹と初期の目的と異って遊びの方向へ向った頃明暦の火事が(江戸)越谷の仮屋まで延焼したのでこの地から姿を消した。而しその後は大房が語ってくれるのだから面白い。越谷御殿は会田家の元禄八年を限に除地が語るのみであるが、大房は道路が語る。

資料其の一　屋敷が享保元年新屋敷取払い明地になった。そして弘福院の代替地まで出来享保八年には、年貢地免税地でもなくなった。更の内容は享保二年の八月廿三日　鷹屋番が鷹番と唱えられ、享保九年には

この鷹番すら廃止された。一七二四年享保九年公方取扱いは中止されたが　天明四年二月廿一日の文書には御差取計方ミ事として（二二四頁）現われている所から、現代化して御差が取り易くして置いたのを残って楽しむ方向が見える（一七八四）だから六〇年後にあたる。この形が現存する御猟場の姿ではあるまいか。

明治維新の新政府では宮内庁に所管され、その関係者が建設した碑文が天徳寺にある。これによると係官は宮内省、伝く御差は現地人を使っていた事がわかるのである。

昔お茶屋のことで一事騒動起った事もナンセンスであろうが、市当人にとっては笑えない事がうなずけるのである。

浄光寺の普賢菩薩　大房鏡写し風の夢より

一、　郡外四沼の内
　　古来百姓普提所大房組、浄光寺へ五反歩公租料
　　納置候畑を普提菩薩と云う」と。

一、　せんだんの木
　　浄光寺に石碑を移した事

一、　公卿と「京都三条上ル」事柳のこと。頼吉将軍の文化朗花朗で京都から公卿を召じ初めた頃として注目を要す。金子家の如来像者銅のと同時年次（下同金）

大房浄光寺、薬師堂

越ヶ谷市の史蹟と伝説　　教育委員会編より

日光街道を越谷宿大沢宿を経て日光に至る街道筋に江戸中期より滑置の御組場として発達した其の一角に当時大森林があり、主として松杉が多かった。

「今も老松が残っている」この十町七反の一角に薬師堂がある。当時鶴の森の薬師堂とも呼ばれ「大江りの薬師堂とも言われた。

「大江り」とは、元荒川がこの一角を流れ、潮の干満によりこの薬師堂の位置迄満水し、又引き潮の時は入江の如き地形を形成する所から、享保年間から明治の中期まで大江りの薬師堂とも呼ばれていた。現在この辺一帯までが往古の原型を小高い岡と元荒川の支流らしき小溝をとどめるのみで、樹令約四百年位と思われる大銀杏の大木と老松が生い繁り本堂がそのまゝ残っている。其の外当時の敷石と思われる石片が小高い岡の周辺に散在している。

古老の言に依れば、八〇六年大同元年（今より千百六六年前建設されたものと云う。而し数度の火災ではつきりした根拠は得られない。現在の建築は大門前から運ばれた建築材をもって「元禄年間迄造築されたものとされているが、その年代は明確でない。古老の言によると、日光の御法会に参加のため飛弾の匠五両が江戸より日光へ行く途中八月の夕暮れ時、大夕立に逢い一夜の雨宿りをした為、当薬師堂へ仮宿し番雨をさけて、その時の御礼にと云うので　一夜にして建立したものとされているが、日数の関係で工事半ばにして日光に立ち去っていった。其の当時薬師堂で準備した建築資材の中で「うるし千貫・朱千貫を実策用に用意したが未実成のままなので朝夕、陽の照らす場所に埋めて、そのまゝ現在に至っているとの伝説があり、又床下に埋まっているとの伝説も伝えてある。朝夕、陽のさす所では小高い岡となっているところと思われる。

建築様式は間口四間、奥行四間の単層屋根四注造りの四角堂で茅葺である。現在はこの上にトタン屋根で被ってある。

当時屋根の上に東西に分れて「竜とひめ」の彫りものが上げられていた。四方回廊附廻縁で続らしてあったが現今は回廊は見られない。廻縁には竜の彫刻で立派なもので用材は桜の木製である。

本堂内部の「こまよせ」の所に元禄十年十月一日の主医とかかれた額があり五十㎝と三十㎝位の矩形の部厚い板の額である。本尊は薬師如来像である。

薬師如来像の坐像　高三米の坐像で直径二米五十㎝の蓮華台に結跏趺坐上九寸を獅子の上に仰むけに

載せ右手を正面に向けている。絵の木の材木に鋼張りで塗装されている。製作者と思われる人物がひざの部分に京都三条上ル」と書いてある（註京都三条の住人奉る」ふ奉納者にして製作者ではない）氏名は現在鋼張りをはがせないのでわからないが、相当確大で立派なものである。

左右に十二神将像の立像があるが二度の大地震で首脚のないものもあるが青銅製の武将と粘土性のものとがある。着色してあるものは粘土製の方が多い。左右合計二十四の立像で高さが四十五cmである。薬師如来坐像には祖授薬師瑠璃光如来とあり生死の苦患を除く故に薬師王医と称し、当時盛に参拝者も多かった模様であった。昔八薬師と称し巡礼し元荒川には渡舟が数多く集ったそうである。

吉先の言によると大銀杏の精に願を立て、これを目標として当時は信仰範囲が遠く千葉県流山あたりからも来たそうである。当時の民間信仰としてこの如来像は十二の大願を立てられる。

十二の大願とは

一、相好具足　五、持戒清浄　九、去邪趣正
二、光明照被　六、諸根完具　十、憂災離苦
三、所求満足　七、除病安樂　十一、飢渇飽満
四、安立大乗　八、転女成男　十二、荘厳豊満

のこれである。この中で第七番の本願は「我が名号を一度耳に聞れば衆病悉く除き身心安楽なり」とある。この第七願によって薬師如来と称する様になったわけで蓮華台に住し、左手を膝上の上に仰けに据せて右手を正面に向けているのは衆生に法性等流に法楽を施与して無明妄想の救恵を施すことを本誓念願としている。

堂近所には木彫で文珠菩薩像の坐像がある。彫りが荒けずりであるが均整のとれた象徴的な名作である。

高さ約五〇cm位である

吉先の言によれば、是五師の作と言われている。

◎薬師五智如来

薬師堂の殿内に立像で立派な壮々たる青銅製の丈の高い一米六〇cmの五智如来が見全な形を保って現形のまゝ残っている。

五智如来とは　五智を体得する仏身にして毘盧遮那像と弥陀像と釈迦像と大日像の五仏を五智如来と云う。

普賢は法界の身として仏識を体得する前眼耳鼻舌身の五識を体転捨して成所作智を体得する。第六意識して妙観察智を得　第七末那識を転捨して平等性を得。第八阿賴耶識を転捨して大円鏡智を得。第九無垢識を転捨して法界体性智を得る。成所作智とは五官作用が

説教にして自利利他の行為により完全なる成佛を挙げ得る能力を意味し妙観察智とは肉眼、天眼、法眼、仏眼、慧眼の五眼であり森羅万象を洞観し、正邪善悪を弱ることなく観察して機根に合致したる説法談話をなす為神力を備し、平等性智とは下は地獄餓鬼等の六凡から上は仏菩薩等の四聖に至るまで、その本性は平等一如にして情非情風聖等の差別なきを透視する真智実を指し、大円鏡智は山川草木禽獣魚貝等の種々相を鮮大鏡らすことなく明々了々に観取すること、恰も大円鏡が高く法界の頂の上に掲げられ萬像悉くその中に顕現するが如き明達の理智を意味し法界体性智とは前述の四智の総合体にして四智の発生する基礎体制を意味する。

五智は以上如来金剛の一智を用いて説き示したものであるが各個独立したものではなく融渾一致一体の知用である。

真言密教では法即概念だけの存在を認めずに概念の存するところには必ず概念の具体化を予想し、その真体的存在を仏、菩薩と見做すことになっている。従って真の一智ごとに尊格を認め 各尊格はその一智を内証の徳としているものと見られる。

即ち大日如来は法界体性智を内証の徳としているものと見られている。

四智如来は大円鏡智を内証の徳としているものと考えられる。又それら諸仏の居住の方位まで定っている。

方位は元来假定のもので有形の事物を想定する場合に便宜のために設けたものであるが、印度に於いては太陽の昇るところを東とし、東をもって物の始めと見做し、太陽の没するところを南方とし、南は物の中間位と見た。

太陽の地平線に入る所を西方となし、西方を物の終りと見ている。

かくの如く東南西の三方が想定されれば北方と中方とは自づと想定される。従って五智如来を五方に配する場合は南南如来が東方に配せられている。この如来は元来釈尊が菩提樹下に於いて煩悩魔、死魔天魔の諸魔を降伏して真如実相の体に初めて悟入され悉皆成仏の根幹であった八阿羅耶識を一転して大円鏡智を体得せられた位置に基づけた如来の名称である。

宝生如来は悲智円満総持厳具足の身にして、これ又釈尊が六万度行を成就せられた区域絶大の位置を表示したものであるから南方に安んじられている。

阿弥陀如来は四位の悲念に動かされ、慈悲三昧に住せられた仏様にしてこれまた釈尊の一、三昧身に外ならない。

五仏五智五方の関係を図示すれば左の如くなる。

九九識	五智	五仏	五方
前五識	成所作智	不空成就	北
第六意識	妙観察智	阿弥陀	西
第七末那識	平等性智	宝生	南
第八阿賴耶識	大圓鏡智	阿閦	東
第九無垢識	法界体性智	大日	中

五智如来の建立時代　釈迦、弥陀、宝生、大日の五仏の連合に刻まれている年代は享保三戊戌十月十五日とあり、五智如来建立五智如来像為諸願成就乞願。

武州新方領大房　別当
浄光寺深有時代本願「覚元」

願主とある

施主名が　江戸安針町講中一五の人とか。近在の大移大林大沢講中が刻まれている。

武州安達郡鴨川村　大河内成勝　大河内勝次
深谷氏宮勝　深谷氏栄寿

法界平等利益　武州足立郡瀬崎村　岡氏勝友、
通生宗國禅定門　極心妙香禅定尼　一視全心禅定

とあり名五仏の連合には成所作智・妙観察智、平等性智、大圓鏡智の別々に刻まれている。其の他数多くの講中名と氏名が刻まれているが、享保年間が大部分である。

当時は築師堂の西方に建って在ったが、現在では南さらしにしておくのは？と云うので一ケ所に集めて置いてある。旧暦四月八日、新の五月八日会も盛大に四方からお参りが絶えず、耳の病、安産などの信仰になっている。

以上

史跡めぐりと共に

余白を借りて。

史跡めぐりも四十八回目・越谷市の主なる神社仏閣は大方巡って古文書や寺宝家宝、伝説口伝等を見たり聞いたりして参りました。

而し　見る人も、語る人も　人の足どりを語っても物言わぬ自然を語る所が少ない。又他所とのつながりを語ってくれる所も少ない。この意味で大房地区を見るに当って気づいた所を参考のために記してみよう。

一、物言わぬ道路と仏像

慶長以前はいざ知らず少くとも慶長九年（一六〇四年）と寛永七年を境とする日光参道・元禄八年・室永四年が第一期として名実共に考えねばならない事である。丁度百年間である。

物言わぬ薬師堂も五智如来も

二、享保二年（一七一七）間八年、同九年は大房地区の厂史を改めて書きかえる事である。これは大房自体の問題でなく　幕府直轄の方針が末端村落に及んだ例証である。　次一世紀文化文政迄

三　其の後明治大正昭和廿年八月廿日迄を前期とし、其の後八月廿一日以後を後期とする。

第一期は越ヶ谷御殿と共に百年

第二期は日光街道と共に百年

イ　越谷御殿と共に大房が歩いた

ロ、会田家没落と歩いた大房の隙地

ハ、日光街道と共に堂塔仏像

隙地も衰微もこの三点が主流である。そして越ヶ谷に衰と栄を代表する大切な所である。而るに他地区に比し資料がまとまっていない

イ　前述の御殿地域＝四藏院不動尊～会田家

ロ　鷹狩り＝鷹番＝鳥屋＝宮崎式田鍬

民間移項＝西度官営式御猟場へと代る経過

第一期の自然背景の変遷　天正寺開墾の放水路＝国市・室永の川市拡張十三間で　農耕地の拡張・御殿の中の鷹狩りと道路、番人屋敷、附帯施設の建てたり、こわしたり。そのかげに会田家の浮沈を横系として織なす地域としての考え方＝堤防工事人足幾材御用留帳

日光街道と佛閣、信仰の区として第二期を迎える

この変化の中に如来像を通して民族の根源印度思想を感知するのである＝資料解説参照

そして現代の厂史を解し将来の厂史を作る研究会とその会員たることを……　資料は意外な所に在る。